

大域的文化システムの再構成に関する 資料学的研究

研究代表者 關 尾 史 郎

1. 分担者

小 林 昌 二 (現社研主担当)
船 城 俊太郎
矢 田 俊 文
原 直 史
山 内 民 博
高 橋 秀 樹
永 木 敦 子

2. 協力者・所属

白 石 典 之 (新潟大学超域研究機構教授)

3. 2006年度の研究活動の概要

2005年度に引き続き、超域研究機構所属の研究プロジェクト、ならびに大学院現代社会文化研究科のプロジェクト（名称はいずれも同じ）と連携して活動を行った。具体的には、以下のとおりである。

① 愛媛大学「資料学」研究会との研究交流

愛媛大学法文学部の学部長裁量経費によるプロジェクトを母体とした、同大「資料学」研究会との研究交流を行った。7月15日(土)には、研究例会を新潟大学五十嵐キャンパスで、10月14、15日(土、日)には、公開シンポジウム「古代東アジアの社会と情報伝達」を愛媛大学法文学部で、それぞれ行った。本プロジェクトからは、代表の關尾史郎とメンバーの小林昌二が、報告や講演を行った。

② 公開講演会の開催

協力者の白石典之の企画・運営により、12月16日(土)に、公開講演会「モンゴル、日本、そして新潟 — 交流の過去・現在・未来 —」を、新潟市グランドホテルで開催した。報告者は白石のほか、広川佐保（人文学部助教授）、櫛谷圭司（工学部助教授）、およびシャグダル・エンクバヤル（大学院現代社会文化研究科博士課程修了）、そして講演者はレンツェンドー・ジグジッド駐日モンゴル国大使であった。

③ 研究例会の開催

上記のプロジェクトと共催というかたちで、2006年7月（愛媛大学「資料学」研究会と共催）、9月、12月、2007年2月（2回）の計5回に上る研究例会を開催した。

④ 調査活動

メンバーの多くが、国の内外において、科学研究費補助金などにより、一次史料・非文字資料・考古遺物の調査を行った。詳細については、『大域的文化的システムの再構成に関する資料学的研究 2006』（新潟大学超域研究機構大域プロジェクト、2007年3月）を参照されたい。

4. 2006年度の研究成果の概要

メンバーの多くは、大学院現代社会文化研究科のプロジェクトにも所属しているため、その調査・研究誌である『資料学研究』第4号に成果を発表した。また同じ大学院の他のプロジェクトにも重複して関わっているメンバーも少なくないため、同じような性格の雑誌である『佐渡・越後文化交流史研究』第7号にも、成果が掲載されている。また大域プロジェクト研究資料叢刊のシリーズでは、矢田が成果をまとめた。このほか、代表者の關尾が編集・発行している『西北出土文献研究』第5号が、非文字資料の特集を組んだが、關尾のほか、白石が企画に参加し、図像資料や考古遺物の利用方法などについて、新たな知見を提供した。

5. 2006年度の研究成果の一覧（上記4に関連するもののみ）

關尾史郎「民楽出土，魏晉壁画墓をめぐる諸問題」，『西北出土文献研究』第5号：133-140頁，2007年3月。

_____「敦煌の古墓群と出土鎮墓文」（上），『資料学研究』第4号：横15-31頁，2007年3月。

小林昌二「日本古代のシナノとコシ」，『佐渡・越後文化交流史研究』第7号：1-16頁，2007年3月。

矢田俊文「越後文書宝翰集毛利安田氏文書と元禄四年米沢藩文書差出」，『資料学研究』第4号：20-27頁，2007年3月。

_____・新潟県立歴史博物館（編）『越後文書宝翰集 毛利安田氏文書』，新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊IX，新潟大学超域研究機構，2007年3月。